

金子光晴と梶井基次郎

—詩と散文に見られる大正末期の感性—

金雪梅*

目次

- I. 序論
 - II. 本論
 - 第一章、詩「果実店」など三篇と小説「檸檬」
 - ① 「私」の憂鬱・裏通り
 - ② 果物屋・色彩へのこだわり
 - ③ 爆弾・爆発
 - ④ 単一色彩の力
 - ⑤ 「私」と爆発の関係——行動者と傍観者
 - 第二章、『こがね虫』から『水の流浪』まで
 - III. 結論 大正末期の感性及びその後の金子
-

I. 序論

1925年（大正14年）1月、同人雑誌「青空」の創刊号に梶井基次郎（1901年2月～1932年3月）の短編小説「檸檬」が発表された。京都に住む肺病を病んだ貧乏学生の「私」は、終始「えたいの知れない不吉な塊」に心を圧さえつけられている。好きだった音楽を鑑賞するゆとりももてない「私」が今心を寄せるものといえば、壊れかかった裏通りなどみすばらしいものばかりである。こうして倦怠を持って余している「私」が果物屋で一顆の檸檬を買う。するとチューブから絵の具を絞り出して固めたようなこの一個の果実に、しつこかった憂鬱が手もなく紛れてしまった。やがて「私」は

* 九州大学大学院博士課程二年

それを持って近ごろ避けていた丸善に入ってみる。そして、日ごろ憧れていた西洋美術書の前に立つのだが、どうしても興味が索然としてしまう。やがて、奇妙なたくらみを思いついて、画集の上にレモンを置き、なにくわぬ顔をしてそのまま外に出て、爆弾として仕掛けた檸檬が大爆発することを想像する。こういう奇妙な筋書きの短い作品であるが、梶井の死後、小林秀雄が「檸檬」を中心に梶井を論評して以来、この作品は心象風景を繊細な文体で見事に描き出しており、梶井の特質を遺憾なく表した代表作であると見做されるようになった。さらに「檸檬」は、無為の倦怠のなかのいらだちが、そのまま主人公の美的感受性につながっているとされ、倦怠の美学を確立した佐藤春夫の『田園の憂鬱』にさかのぼる大正の憂鬱と倦怠を継承する作品であると考えられている。

このように、「魂の事件」を語る独特の作風によって、わずか九年間の短い創作期間で「近代日本文学の古典」¹⁾の地位を占めるに至った梶井と、詩人の金子光晴（1895年12月～1975年6月）について、接点らしいものは従来の研究ではほとんど指摘されていない²⁾。

金子光晴が詩人としてとくに評価されたのは昭和に入って以降の作品によってであり、代表作とされるのは天皇性、国家権力、侵略戦争、封建的国民性などについての、晦渋な比喩や象徴的な表現を駆使した鋭い風刺や批判を盛り込んだ詩作品である。しかし金子の文学活動は1919年（大正8年）にまでさかのぼり、民衆派詩を模倣した第一詩集の『赤土の家』、実質的に詩壇に認められた象徴主義的な第二詩集『こがね虫』などもふくめて、六十年にわたる創作期間の間に詩風は変化しており、金子文学の明確な位置づけははまだ決着がついているとはいいがたい状況である。戦中戦後の難解ないわゆる「反戦詩」をはじめとして、研究の余地が多く残されている。

そこで、今回は従来ほとんど論じられていない金子の大正末期の作品、とくに「果実店」など三詩篇と、梶井の小説「檸檬」との意外な接点を取り上げ、それぞれの作品のモチーフや創作手法の共通点、相違点を分析し、そうした異同点を大正末期という時代のパラタイムにおいて考察したい。さらに梶井の作品と比較することで、金子

1) 『新潮日本文学辞典』（新潮社、1988・1）263頁。

2) 『日本のアウトサイダー』（新潮社、1965・11）で河上徹太郎は、「エキゾティズムが絵画趣味なものを手段とするのは最も手取り早い方法論である。アウトサイダーが色彩主義を拠り処にすることは、理論的には根拠はないが、その点で端的に結びつき易いだろう」と述べ、梶井基次郎の『檸檬』の「強力な色彩」の原型は金子の詩「果実店」にあるとし、また、『梶井基次郎論』（有精堂、1985・7）で鈴木二三雄は、河上の説を紹介したうえで、金子の詩「果実店」を収録している詩集『水の流浪』（大正15年）の出版が雑誌「青空」の創刊より遅れていることを指摘し、金子の詩が『檸檬』の原型になるという河上の推測は、「水の流浪」を根拠に考えれば理屈の通らない話である」と、その説を否定している。

の大正時代の詩風を浮き彫りにし、また詩人のその後の詩風の変貌との関係を探りたい。

Ⅱ. 本論

第一章、詩「果実店」など三詩篇と小説「檸檬」

金子は1924年（大正13年）4月の詩誌「日本詩人」に詩「古靴店」、「果実店」、「色の深淵」の三篇を発表した。後にこの三篇の詩は詩集『水の流浪』に収められるが、金子の自伝と年譜から、これらの作品は1923年9月関東大震災の後、東京を離れて名古屋、大阪などを転々とした頃の創作と推定される。第一章ではまず、金子のこの三篇の詩を作品Bと呼び、梶井の小説「檸檬」を作品Aとし、両作品のテーマ、作品内のモチーフの設定などについて具体的に比較し、両作品の異同性を検討する。

① 「私」の憂鬱・裏通り

A—1 えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧へつけていた。

B—1 冬空に 悲しい霽雨の雲の表情が岐かれゆく。

梶井の「檸檬」は「えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧へつけていた」という有名な一文から始まり、小説は第一人称「私」で展開していく。主人公「私」の心にわだかまる憂鬱がこの作品の主題になっているらしいことが、冒頭からすぐに推測される。

一方、金子の詩「果実店」も「冬空に 悲しい霽雨の雲の表情が岐れゆく」という暗いトーンで始まり、「私」という一人称で進行していく。「暗鬱な、圧伏されたこの自然の中に、私の猶若々しいヒステリックな感情が赤い気象旗のやうに狂わしくはためき」という特異な表現が目を引くが、「私」を圧迫し動揺させる大きな憂鬱は「檸檬」と共通している。

A—2 何故だかその頃私は見すばらしく美しいものに強くひきつけられたのを覚えている。

風景にしても壊れかかった街だとか、その街にしてもよそよそしい表通りよりもどこか親

しみのある、汚い洗濯物が干してあったりがらくたが転がしてあったりむさくるしい部屋が覗いていたりする裏通りが好きであった。

B-2 私は、殊にもうら悲しい裏町の、物干し場や、ベコニアの鉢など列んだ裏二階の間を歩いていった。暗鬱な、圧伏されたこの自然の中に、私の猶若々しいヒステリックな感情が赤い気象旗のやうに狂わしくはためきわれとわが解説すべからざる『時代』と『年齢』の鬱勃の中に、悲壮な、郷愁的な、『生新』と『爆発』を願っていた。

さらに、A-2とB-2に見られるように、二作ともに、雑多で汚い壊れかけの裏通りが舞台として設定されている。裏通りは作品の中では書店「丸善」に代表される華やかな表通りと対蹠的なものであるが、都市に欠くことのできない一部分である。梶井の場合は「丸善」という日本における近代西洋文化の象徴による圧迫感とそれへの抵抗とが核になっているのに、そうした近代西洋文化への敵意は金子には見られない。この時期の少し前に佐藤春夫の『田園の憂鬱』があるが、その中では都市とは異なる郊外の田園にロマンチックで幻想的な美を見出そうとする感受性が見られる。一方、金子と梶井の作品では、雑多な都市に住まう庶民の生活に息づいているものに注意が払われ、近代都市の裏通りが醸し出すうら悲しい雰囲気は暗澹とした主人公の心中と照応し、またその風景の寂しさは主人公の憂鬱を一層助長していると考えられる。そして、梶井の主人公の場合は、そうしたうら悲しい裏通りに、ある種の美を感じ取っていることも読み取れる。

② 果物屋・色彩へのこだわり

「檸檬」の中で、主人公の憂鬱な胸中が変化するのは「とうとう私は二条の方へ寺町を下り、そこの果物屋で足を留めた」というくだりである。一方、金子の詩においても「私は、ハタと驚いて立ち止った」場所は「果実店」であった。このように両作品において、主人公が裏通りの中で不意に気を惹かれ立ち止まる場所が遠い異郷のものが並ぶ果物屋であるという点が注目される。

A-3…とうとう私は二条の方へ寺町を下り、そこの果物屋で足を留めた。ここでちょっとその果物屋を紹介したいのだが、その果物屋は私の知っていた範囲で最も好きな店であった。そこは決して立派な店ではなかったのだが、果物屋固有の美しさが最も露骨に感ぜられた。果物はかなり勾配の急な台の上に並べてあって、その台というのも古びた黒い漆塗りの板だったように思える。何か華やかな美しい音楽の快速調

の流れが、見る人を石に化したというゴルゴンの鬼面——的なるものを差しつけられて、あんな色彩やあんなヴォリュームに凝り固まったというふうに果物は並んでいる。青物もやはり奥へゆけばゆくほど堆高く積まれている。——実際あそこの人参葉の美しさなどは素晴らしかった。それから水に漬けてある豆だとか慈姑だとか。

B-3 然し、私は、ハタと驚いて立ち止った。

そこに、一軒の果実店の、その極度に明るい、豊饒な『色彩の祭り』が、私のくらいところに火事のやうに燃え移った。五点形に、三角形に、或いは乱雑に積み上げた紅い林檎、黄色いネーブル、蜜柑、朱欒の類、爪型のバナナ、梨、パイナップル、その他、季節外れな南方の邦から来た果物のたぐひが、玩具の世界のやうに熾烈に、花やかに、ロマンチックに、わが人生を情熱化している。光沢のいい、新鮮な、開放的な、夢のような靈魂が、私の心を、頭から、爪先まで暢流せしめた。

さらに、引用A-3とB-3のそれぞれの果物屋の描写を追えば、そこで繰り返し強調されているのはいずれも果物の多様で鮮烈な色彩であることがわかる。「何か華やかな美しい音楽の快速調の流れが、見る人を石に化したというゴルゴンの鬼面——的なるものを差しつけられて、あんな色彩やあんなヴォリュームに凝り固まったというふうに果物は並んでいる」というように梶井は華麗な暗喩を用いている。一方、金子は「極度に明るい、豊饒」、また「玩具の世界のやうに熾烈に、花やかに、ロマンチックに」というようにわりあい直接的な言葉でその色彩を表現している。両者とも、新鮮な果物を題材としながら、油絵にでも描くような描写の仕方をしており、また描かれた果物からは永久に褪せないような鮮烈な色彩が放射されるようである。梶井が音楽と美術に興味をもっていたことは、彼の書簡についての先行研究から判明している。³⁾金子は美術大学を中退し、海外流浪中は絵を描いて旅費を工面したという経験の持ち主であり、『こがね虫』の序文において吉田一穂は、色彩を意識的に詩の内容に導いてその本質と融合せしめる金子を「外光派の詩人」⁴⁾と称している。こうしてみると、両者とも似たような感受性によって、絵画の鮮烈な色彩の表現方法を受け止め、さらに各自の作品の中にそれを表現したとも考えられるであろう。

また、金子の詩の中では「どす黒い街」、「黒い泥濘」⁵⁾、梶井の小説の中で

3) 中島国彦『近代文学にみる感受性』（筑摩書房、1994・10）

4) 『金子光晴全集第一巻』、（中央公論社、1976・4年）578頁。

5) 「泥濘と、屍魚のどす黒い街……」、「花やかなものが、往来へ、四方に散乱し、黒い泥濘の海に、赤や、黄や、紅の色彩がころがりひろがった。」（「果実店」）『金子光晴全集第一巻』、（中央公論社、1976・4年）327頁。

は「古びた黒い漆塗りの板」というように、鮮やかな主役である果物の背景になっているのはいずれも、憂鬱に相応しい色調である。このような「暗い」、「黒い」色彩とは対照的な明るい豊饒な彩りは、憂鬱という感覚とは相容れない色彩であるが、二作ともそうした明るい色彩が、憂鬱の感覚との間に緊張感のあるバランスを保ち、さらに主題の暗い主調低音を際立たせる効果を発揮しているのである。

③ 単一色彩の力

詩「果実店」では、黒い泥の中に「赤や、黄や、紅の色彩」が鮮明に転がる場面が、色の祝祭の一つのクライマックスとなるが、この色彩の世界は三篇の中の次に詩「色の深淵」にも、引き続き描かれている。

A-4 レモンエロウの絵の具をチューブから搾り出して固めたような単純な色も、それからその丈の詰った紡錘形の恰好も。(中略) その時私は袂の中の檸檬を憶い出した。本の色彩をゴチャゴチャに積みあげて、一度この檸檬で試してみたら。(中略) 見わたすと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の階調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまって、カーンと冴えかえていた。

B-4 この単一な色の対照、交錯、……縞や井桁などの質素な図式のなかに、人に、高い風、青空を染めると同じ情調を湧かしめる。／それは絵画のやうな、擬象的な世界の表出でなく、直接に、単的に、それらの自然と調和し、交渉するものである。(詩「色の深淵」)

引用B-4で、強調されているのは単一色彩、つまり原色を持つ力である。光が満ちた透明な色合いに異質な原色が衝突し、そこに明るい絵画のような視覚美の世界が広がっている。それらの単一色彩は周囲の自然と違和感なく調和していき、すべてのものをその単純な色彩の中に吸収していくような力を持っている。

一方、「檸檬」の中では単純色として黄色が一際目立っている。向日葵が黄色であるように、黄色は喜びのイメージを表し、光のスペクトルの中でも最も明るい色で、専門的には進出色と言われている。光の屈折率が小さいために、前方に飛び出して大きく見えるという⁶⁾。梶井の小説ではこの黄色の色彩的特徴が見事に生かされている。黄色いレモンが特別なインパクトをもち、主人公の心を躍動させ、幸福感を生み出しているのである。レモンの黄色の鮮烈な色合いはまた周囲の事物を圧倒する。その

6) 千々岩英彰『色彩学概説』(東京大学出版会、2001・4) 146頁。

檸檬の色彩はガチャガチャした色の階調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまっ
て、カーンと冴えかえっていた」。色とりどりの雑多な美術書であふれる丸善の書籍棚の
前で、一個の単純色のレモンは周囲のすべての色彩を吸収し、場の雰囲気をついに
まとめ上げているのである。

このように、多様な色彩を表現しながらも、ある特定の単一色彩（「檸檬」におい
てはレモンの黄色であり、詩「色の深淵」においては限定されない単一な白、赤、青
などである）にいわばその場の統率力を見出し、周囲との強力な調和力を発見した点
にも二作の類似性がうかがえる。

④ 爆弾・爆発

詩「果実店」では、前半に私の「ヒステリックな感情」が、「『生新』と、『爆
発』を願っていた」と予言していた通り、結末の部分では果物商人の転倒によって地
面に散らばった色とりどりの果物が爆弾に見立てられ、見事に「爆発」が成し遂げら
れることになる。また、小説「檸檬」のクライマックスは、主人公が積み上げられた絵
画の本の上に自分が置いたレモンを見て、奇妙なたくらみを思いつく場面である。主人
公は、計画通り爆弾として仕掛けたレモンによって丸善が爆発することを空想する。

A-5 丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢が私で、もう十
分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなにおもしろ
いだろう。

B-5 このとき、一人の果物商人が、門口の荷車から、大きな丸籠に盛り上げられた一
ぱいの夢を、店の方へ運んでいたか、どうしたはづみか、その重たすぎる籠から、
アッとみる間に、平均を失ひ、その傾いた腕から、爆弾のやうに、果物がひっくりか
へった。

同じ爆弾という小道具が両作品において物語の大団円を主導することとなる。「爆
弾」という言葉は、1923年（大正12年）創刊された『赤と黒』の創刊号に掲げられ
た「詩とは爆弾である！ 詩人とは牢獄の固き壁と扉とに爆弾を投ずる黒き犯人であ
る！」という宣言に見られるように、この時期、アナキスト系の詩人が好んで使った表
現である。

たとえば、壺井繁治の詩「拳」には次のように表現されている。「針のような痛
苦、／血走った意識、／我々は我々の意識の先端をもって戦おう、／我々の拳は石

のように固められた！／最早。妥協を許さない。／我々の拳は我々の生命を賭けたる爆弾だ！」⁷⁾。自分の拳を爆弾とみなし、それを武器として戦う相手とは、「敵」の「ブルジョア」（詩「深夜の意識」）である。つまり、同じ破壊的な意味合いを持つ爆弾が作品中に登場するにしても、梶井と金子の作品においては、攻撃や破壊させる意志は、詩「拳」に頻出する「我々」という言葉にみられるような社会的意志として集約されたものではない。レモンや色とりどりの果物からなる「爆弾」の目標物は、明確な階級意識が捉えた現実社会の不正ではなく、ただ個人の内部の感覚なのである。

小説の中では、爆弾を仕掛けた張本人の「私」は爆発を空想するだけで、それまでの憂鬱な感覚が吹き飛び、「微笑ませた」、「面白い」、「熱心」などという、気分の高揚を表す表現が現れる。詩「果実店」でも「私の黒い憂鬱は、一どきに爆発した」、「香気と、生命の花が、一瞬、泣叫ぶように、私の心に開いた」という、鬱屈した心が解き放されるさまの表現に一転する。レモンを爆弾として爆発させることを夢想する小説「檸檬」も、バランスが崩れ地面に散らばった果物を爆弾が爆発したと感じて「万歳！」と叫ぶ詩「果実店」も、いずれも結末は現実的ではないが、主人公の憂鬱からの脱出の願望や、さらにそのような爆発の錯覚がもたらす解放感が共通している。

⑤ 「私」と爆発の関係——行動者と傍観者

両者の差異点として、両作品の様式、文体の相違があげられるが、本質的には、主人公と爆発との関わり方の設定が違ふと考えられる。言い換えれば、たとえ一瞬にしろ、憂鬱から解放される瞬間を獲得しようとするその方法が異なっているのである。⁸⁾

小説「檸檬」では、爆弾は主人公である「私」が自分で仕掛ける。絵画書を積み上げて、レモンをその上に置くのは実際的な行動であるが、その後の爆発も「憶い出した」、「奇妙なたくらみ」、「想像を熱心に追及した」という表現に表われているように、能動的な意識の働きかけなしには想定できないものである。

詩「果実店」では、爆発の瞬間は「果物商人」によって提供されている。「どうしたはずみか」というように、原因がはっきりしないまま、運んでいた果物が籠から地面に

7) 「赤と黒」第二輯（1923・2）に発表。『壺井繁治全集』（青磁社、1988・1）26頁。

8) 沢木久枝は「梶井基次郎「檸檬」を中心に」の中で、芥川竜之介の小説「蜜柑」は偶然の出来事で刺激を受けた美意識と瞬間に感じた人間関係の温かみにより疲労と倦怠が慰められるに対して、梶井基次郎の「檸檬」は、美意識とそれに加味された爆発の快感によるものであると述べている。二作の関連についてのこの指摘は本稿にとって大きなヒントとなった。『リトルマガジンを読む：「主潮」「山繭」「青空」「驢馬」「文科」』（紅野敏郎編、名著刊行会、1982 5）。

落ちる。ちょうど雨の後だったのか、泥沼の中に色とりどりの果物が散乱する。動いていた画面がスローモーションになったような風景である。そして、「私」はただその光景をそばで見ているだけである。

解放の仕方はどうであろうか。詩の中では、バランスを保っていたものが、偶然的な出来事によって、崩れることで解放感を感じ取っている。主人公は「夢」である果物を自分と同一化している。果物が籠に入れられている状態は、まさに主人公が憂鬱と重圧におしひしがれている環境そのものである。それに対して、「檸檬」は、偶然ではなく、自分のみずからの力で設定した状況によって、解放感を得ている。登場人物は「私」だけであり、すべてが「私」ひとりの内部において始まり終結する。このように、作者が作品の中で主人公に選ばせた暗い現実からの脱出方法は、一方は行動者としてのそれであり、他方は傍観者としてのそれである。

第二章、『こがね虫』から『水の流浪』まで

梶井基次郎は高等学校に入る頃から肺の病気を患って三十二歳の若さで死ぬまでこの業病にとりつかれ、実際の作品にもこの病気の影を感じさせないものは少ない。それゆえに、彼の小説においては「その適確な病状のあとに、焦燥と嫌悪をともなった倦怠がおとずれるところがかかれ、次にその倦怠からのがれてさまよおうというはこびにうつるのである」⁹⁾と評されている。この病者であるがゆえに研ぎ澄まされた清澄鋭敏な感性という点で言うと、梶井と金子にも共通点が見られる。金子は自伝の中で「僕が病気にならなかつたら、僕と詩とはいまだに無縁だったかもしれない」¹⁰⁾と詩との出会いについて述べている。金子は大正四年の年末から肺尖カタルで入院生活中、中条辰夫から当時詩を書いていた保泉良親兄弟を紹介されたという。その時からで、不安定な精神状態を研ぎ澄まされた感性で綴る抒情的な詩を書き始めたのであるが、第二章では金子の大正末期の「果実店」など三詩篇に至るまでの詩風の変遷を簡単に辿ってみる。

金子の創作開始当初の詩は、当時隆盛していた民衆詩派をなぞるような、生命感が溢れている大地や太陽や自然への感応、賛嘆を表現した作品がほとんどであった。たとえば「この大空は、海からの深い青空である。／あそこから晴空！／いく日も、またいく日も、かぎりなくつづいた晴空である」（「小品」）、「太陽は僕らのこのころの反射鏡だ。／それは僕らをてらすやうに、／わけへだてなく、人々をてらす／

9) 小島信夫「病者の心理と健康の文学」、(「文芸読本」、1977・4) 71頁。

10) 『金子光晴全集第六巻』、(中央公論社、1976・3) 127頁。

どんなところをもあたためる。」（「太陽」）のように、1919年（大正8年）1月に刊行された第一詩集『赤土の家』に収められているのは、すべて波や海や太陽など、大自然と語り手の何の違和感もない交歓が展開されている作品である。しかし、金子自身が第二の詩集『こがね虫』をもってみずからの処女作と称しているように、詩人として当時の詩壇に認められたのは、第一回渡欧の成果と言うべき詩集『こがね虫』によってである。

義父が残した遺産で詩集『赤土の家』を出版した直後、1919年2月、金子は第一回目の洋行に出かける。ベルギーでの約一年半の滞在生活については「朝は読書し、昼は散歩しながら詩を書いたりして、夜は、毎晩のようにルパージュのもとにでかけて行って話をして、夜を更かした」と記し、ベルギー滞在中に金子は西洋の詩の勉強に熱中した。後に自伝の中で、ヴェルハーレンからサマンにとりつき、更にレニエ、モレアス、ボードレールなどの順で象徴主義の詩を涉猟したと追憶している。¹¹⁾金子の初期の作品に見られる西洋の象徴詩法から受けた影響については別にまた詳しく論じなければならぬが、この時期の勉強の成果が1923年（大正12年）に刊行された『こがね虫』に最もはっきりうかがえる。次に挙げるのは『こがね虫』に収められている詩句の例である。

「ああ 三月が近づいた。／金晴の曙の空は、／紅色の樹林は夢見つつ唄ふ。」
（「三月」）

「時は嘆く。／林園に黄金の花燭台が並ぶ頃、／（中略）地上に華舫の如く牡丹花
が解散する頃、／黄蜂の唸が、其周に光輪を書く頃、」
（「時は嘆く」）

「私は、太陽の黄金と、其縞である。／若楓や、小葉の林に、／金亀子の翅、蠱惑
する小径に、／私は、世界を躍り歩く侏儒である。／私は水底の銀の陽炎の唄であ
る。」
（「誘惑」）

これらの詩句はいずれも「光」を表現しており、すべてのものが眩しい光の躍動の中に存在するさまをうたっている。特に繰り返し使われる「金」、「銀」という言葉は非現実な夢の世界を呼び起こす。このように、この時期の作品は華麗な詩句による耽美主

11) 「僕の読書はそこで、ヴァルアーランの詩集からはじめることにした。—（略）—フランス象徴主義詩人の詩にさかのぼりた。—（略）—ヴァルアーランからサマンの『西班牙王女の花園』にとりつき、更にレニエの『水の都市』、モレアスの『章句』、ボードレールの『悪の華』の順序で、エレディアの『トロップエ』にさかのぼり、ルコント・ド・リルに到着した。」『金子光晴全集第六巻』、（中央公論社、1976・3年）141頁。

義的な表現や豊饒なレトリックを駆使し、非日常的な絢爛たる色彩感覚を展開したものが多く、こうして、金子はパルナシアン的な詩法により、民衆詩の単調な形式や自然への素朴な感応を歌う詩から脱したと考えられる。当時詩壇の主流は前衛的な詩やヒューマニズムの詩で、『こがね虫』はかならずしも高い評価は受けなかったものの、この詩集によって、詩人は一定の地歩を固めた。

しかし、この高揚感のある光の世界は『こがね虫』出版の二ヶ月後、思いもかけぬ関東大震災によって壊された。詩人は、震災地の東京を後にして関西の地を転々と渡り歩き、大きな虚無感を抱えて書きためた詩篇を1926年（大正15年）出版された詩集『水の流浪』にまとめる。金子自身がこのあたりの詩について「それは、流離の書で、作品としては弱体であった」とし、「『水の流浪』は、『こがね虫』のおちぶれゆくあわれな道筋であったが、僕の苦しさは、じぶんの落魄をじぶんで納得して甘受しなければならぬ仕儀になってゆく気弱さであった。そこに当時の芸術派共通の悲しみがあった」¹²⁾と述懐している。題目に表れているように、『水の流浪』は、感傷や憂愁といった現実的な感覚がそのまま吐露された作品がほとんどで、居場所の定まらない精神の流浪が描かれている。

Ⅲ. 結論——大正末期の感性及びその後の金子

近代的な憂鬱を表現した文学としてもっとも知られているのはボードレールの作品であろう。鈴木二三雄は「憂鬱の系譜——ボードレールから梶井基次郎まで」¹³⁾の中で、「梶井基次郎が昭和二年に、アーサー・シモンズの英訳本で『パリの憂鬱』および『悪の華』を愛読していたことは、淀野隆三、中谷孝雄の『梶井基次郎全集』年譜に書いている。—（略）—処女作「檸檬」を書いた頃は、まだボードレールに触れていなかったことは誰しも認めるところである」と述べている。鈴木はさらに、佐藤春夫の「田園の憂鬱」、「都会の憂鬱」の中に息づく、無為の中の憂鬱と倦怠、社会との違和、因襲への反抗等の意識は、まさしくボードレールの、「梶井文学の中の「憂鬱」という問題を取り上げただけでも、ボードレール——佐藤春夫——梶井基次郎という系譜が成り立つ」との結論を導いている。

金子は第一回のヨーロッパ滞在中にフランス象徴詩派の勉強に没頭し、更には晩年にはボードレールの『悪の華』を全訳した。第二章で述べてように、金子の初期の作

12) 『金子光晴全集第六巻』、(中央公論社、1976・3) 164頁。

13) 鈴木二三雄『梶井基次郎論』、(有精堂、1985・7) 137頁。

品に見られるボードレールを含む西洋の象徴詩法から受けた影響については別にまた詳しく論じなければならないが、金子の憂鬱というモチーフを考える際、詩「果実店」とボードレールの散文詩「無能なガラス屋」の比較考察も重要となってくる。散文詩「無能なガラス屋」では、無為の倦怠感に取り付かれた主人公が「派手な行動をやっつけてのけるべく駆り立てられるような気持ち」に煽られ、町を歩くガラス商人に狭い階段を登らせて部屋のある七階まで呼ぶが、何も買わずにそのガラス商人を突き飛ばし、そしてさらに、建物から道路に出るガラス商人を狙って、小さな花の植鉢を落とす。その衝撃でガラス屋は転倒し、無色なガラス板が無残に砕けて大音響を発する。こうして、「人生を美しく！」と叫ぶ主人公は一瞬の里に享樂の無限を見出す。「無能なガラス屋」の「無能」は憎悪と侮蔑に満ちた表現である。ボードレールの持つこのような暴力性、人間憎悪は金子にはないことであるが、ここに見られる主人公の憂鬱と倦怠、そして、ガラス屋の転倒によって、それらが一挙に発散するという筋書きは金子の「果実屋」に酷似している。

更に、金子が三篇の詩を発表した雑誌『日本詩人』について少し付け加えておくと、詩誌『日本詩人』は、詩話会の機関誌として刊行された比較的に大規模の雑誌で、様々な短命な同人誌が林立する中、大正年代の詩誌の中で最も長く続いた。萩原恭太郎のような新進詩人を世に送り出す一方で、川路柳虹や萩原朔太郎のような重鎮も活躍した雑誌であり、各号に各傾向の詩、評論、翻訳が幅広く掲載された。当時、文学を志していた梶井基次郎がこの雑誌を読んでいた可能性は十分にあると言える。

しかし、ここで指摘したいのは、両作品には実際に如何なる影響関係が見られるかということだけではなく、作品が生まれる時代の雰囲気についての考察も必要であるということである。大正時代を象徴するとして神経衰弱が挙げられるが、憂鬱は神経衰弱と一脈通じた感覚である。広津和郎の1917年（大正6年）の『神経病時代』、あるいは佐藤春夫の1917年（大正6年）の『田園の憂鬱』、1922年（大正11年）の『都会の憂鬱』、更に大正時代の代表的詩人萩原朔太郎の「憂鬱」の語が頻出する詩集——1917年（大正6年）の『月に吠える』、1923年（大正12年）の『青猫』——などにおける表現はその例である。金子と梶井の作品に見られる憂鬱の発現の様相も、こうした流れにそったものであるともいえよう。

しかし、作品中における暗鬱な現実から脱出する「私」の方法の設定の差異から、当時の両作者における現実に対する態度の差異がうかがえる。梶井においては、主人公の能動的な行為、つまりレモンを爆弾として仕掛け丸善を爆発させることを想像するという行為によって、抱えていた憂鬱を払拭することになる。鈴木貞美は、梶井の

作品の中でテーマとなるのは怠惰や憂鬱ではなく、「精神が憂鬱から脱する局面である」¹⁴⁾と指摘している。確かに、梶井のその後の作品においても、憂鬱に捕われた主人公の精神の動きをただ追うのではなく、憂鬱の解決法を模索するさまが描かれる。しかし、その解決方法として、自己完結的に、つまり主人公の心の中の空想によって自分の煩悶を解決しようとする発想には、憂鬱をもたらした状況の打開は実際には期待できないという諦念めいた認識が潜んでいると考えられる。

両作者の戦中・戦後の創作を比較することは梶井の先逝で不可能であるが、金子はその後中国、東南アジア及びヨーロッパでの5年間にわたる海外流浪をへて、1931年（昭和6年）に帰国してから、天皇制を批判した「灯台」、徴兵を否定した「天使」、日本の封建的な遺風をあばいた「紋」、「落下傘」など、現実批判の詩を書いた。これらの金子の創作活動からは、大正末期に見られたような、現実に対して、偶然に起こった瞬間的な出来事によって受動的に対処したレベルから脱却し、暗鬱な現実に対して批判を深める変化のさまがうかがえる。つまり、今回分析した三篇の詩によって代表される詩集『水の流浪』あたりでは、金子は世の中に対して漠然とした反抗心は抱いていたものの、まだ外界の現実に対して積極的な批判の目も持ち合わせていなかったのである。このように、梶井の「檸檬」と比較することで、金子の大正末期の作品内の語り手の精神のいわば限界が一層明瞭となり、その後の語り手が変貌する必然性を突き詰めることができる。ほとんど注目されていない同時期の両作者の作品をあえて比較する意味がそこにある。

【参考文献】

〈テキスト〉

『梶井基次郎全集』全3巻、筑摩書房、1999年～2000年

『金子光晴全集』全15巻、中央公論社、1975・10～1977・1

〈論文〉

沢木久枝「梶井基次郎「檸檬」を中心に」、『リトルマガジンを読む：「主潮」「山繭」「青空」「驢馬」「文科』』（名著刊行会、1982・5）

小島信夫「病者の心理と健康の文学」（「文芸読本」、1977・4）

〈単行本〉

菊池康雄『現代詩の胎動期』（現文社、1967・10）

14) 鈴木貞美『梶井基次郎の世界』（作品社、2001・1）326頁。

- 河上徹太郎 『日本のアウトサイダー』 (新潮社、1965・11)
鈴木二三雄 『梶井基次郎論』 (有精堂、1985・7)
鈴木貞美 『梶井基次郎の世界』 (作品社、2001・11)
中島国彦 『近代文学にみる感受性』 (筑摩書房、1994・10)
『研究資料現代日本文学 第①巻』 (明治書院、1980・3)
『研究資料現代日本文学 第⑦巻』 (明治書院、1980・11)
『壺井繁治全集』 (青磁社、1988・1)
『ボードレール全詩集Ⅱ』 (筑摩書房、1998・5)
〈辞典類〉
『新潮日本文学辞典』 (新潮社、1988・1)

要 旨

1924年（大正13年）4月の詩誌「日本詩人」に金子光晴（1895年12月～1975年6月）が、関東大震災後関西を転々した頃に創作した詩「古靴店」、「果実店」、「色の深淵」の三篇を発表した。また、1925年（大正14年）1月、同人雑誌「青空」の創刊号に梶井基次郎（1901年2月～1932年3月）が短編小説「檸檬」を発表した。本論では、金子の大正末期の作品、とくに「果実店」など三詩篇と、梶井の小説「檸檬」との意外な接点を取り上げ、作品のテーマや創作手法、作品内のモチーフの設定などにおいて、両作品の同異性を検討した。

まず、類似点として、この二作もともに、雑多で壊れかけの裏通りが舞台として設定され、近代都市の裏通りが醸し出すうら悲しい雰囲気が暗澹とした主人公の心中と照応し、憂鬱の感覚を一層助長している。また、両作品において、主人公が裏通りの中で不意に気を惹かれ立ち止った場所が果物屋であるという一致点があり、さらにそこで強調された憂鬱という感覚と相容れない果物の明るい豊饒な彩りは、憂鬱の感覚との間に緊張感のあるバランスを保ち、主題の暗い主調低音を際立たせている。また、多様な色彩を表現しながらも、ある特定の単一色彩に周囲との強力な調和力を見出した点にも二作の類似性が見られる。更に、両作品において物語の大団円を主導するのは同じ「爆弾」という小道具であり、主人公の鬱屈からの脱出願望、さらにそのような爆発の錯覚がもたらす解放感が共通している。

金子の詩「果実店」が、作品における主人公の憂鬱と倦怠の表現、そして、人物の転倒によって、それらが一挙に発散するという筋書きが、ボードレールの散文詩「無能なガラス屋」に酷似していることを指摘し、憂鬱というモチーフにおけるボードレール——金子光晴——梶井基次郎という系譜が成り立つ可能性を示唆した。さらに類似点が多く見られる両作品を時代のパラタイムにおいて考えると、金子の詩と梶井の小説に見られる憂鬱の発現の様相も、大正末期の「憂鬱」をテーマにした様々の作品の流れにそったものであるともいえる。

両作品の差異点として、作者が作品の中でそれぞれ行為者と傍観者として主人公に選ばせた暗い現実からの脱出方法の違いが見られる。作品中におけるこのような設定の差異から、当時の両作者における現実に対する態度の差異がうかがえる。主人公に能動的な行為を取らせた梶井の「檸檬」及びその後の作品においては、憂鬱に捕われた主人公の精神の動きをただ追うのではなく、憂鬱の解決法を模索するさまが描かれる。しかし、その解決方法として、主人公の空想の中においてのみ、自分の煩悶を解決しようとする発想には、憂鬱をもたらした状況の打開は実際には期待できないという諦念めいた認識が潜んでいると考えられる。

両作者の戦中・戦後の創作を比較することは梶井の先逝で不可能であるが、金子はその後長い海外流浪をへて帰国してから、数多くの現実批判の詩を書いた。これらの金子の創作活動からは、大正末期に見られたような、現実に対して、偶然に起こった瞬間的な出来事によって受動的に対処したレベルから脱却し、暗鬱な現実に対して批判を深める変化のさまがうか

がえる。つまり、今回分析した三篇の詩によって代表される詩集『水の流浪』あたりでは、金子は世の中に対して漠然とした反抗心は抱いていたものの、まだ外界の現実に対して積極的な批判の目も持ち合わせていなかったのである。このように、梶井の「檸檬」と比較することで、金子の大正末期の作品内の語り手の精神のいわば限界が一層明瞭となり、その後の語り手が変貌する必然性を突き詰めることができる。ほとんど注目されていない同時期の両作者の作品をあえて比較する意味がそこにある。

キーワード：憂鬱 裏通り 色彩 果物屋 爆弾 爆発 行動／傍観 大正末期 感性

투 고 : 2007. 2. 28
1차 심사 : 2007. 3. 10
2차 심사 : 2007. 3. 31

住 所 : (813-0016) 日本福岡市東区香椎浜2-1-4-506

電 話 : 092-683-0550

e-mail : kinsetsubai@hotmail.com